

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	古いおきて : 創作
Author(s)	吉丸, 克己
Citation	龍南, 233: 16-34
Issue date	1936-02-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7304">http://hdl.handle.net/2298/7304</a>
Right	

## 創作

# 古いおきて

吉 丸 克 己

十町程の夜道は寒かつた。玄海灘の大浪の頭を蹴散らし蹴散らし白泡をたてる北風が、防風林を抜けて矢の様に骨までしみとほる。研ぎ澄ました鎌の様な月光に緩かな砂丘の下に波の散るのが白い。ゴーと松の梢の鳴る音に仙造は幾度かマントの襟に首まで埋めた。

今度こそは俺の言ふことを聞き入れて貰はう。なあに廣木さんも人間だから、血もあり涙もあらう。びく／＼する必要はない。しつかりやるのだぞと幾度も頭の中で繰返し我と我が勇氣を煽つたのであるが、寒い松の陰りに、それも吹き消され勝ちである。廣木の前では、どうして思ふことが思ふまゝに言へないのか、他人の前では氣後れはしないのにと仙造は自分の臆病を不思議に思つた。蛇に睨まれた蛙の様に廣木の前で縮み上る姿を思ひ出すと、頬がほてる程自分の意久地なさに恥しさを感じる。もう五十の聲がかゝつてゐるではないか、娘の兒ではなし、思つた事が言へないといふ法があるものか。——だが何と言つたものか？やはり廣木には近付けない様な氣がする。寒い風の音。

目的の部落に着いた。年が押し迫つたので猫の様に背を丸め、足音せはしく行く人を見るのは寂しい。家々の様子も又寂しい。屋根の右半分が傾いてゐるのや、傾斜の下の濕つた庭が冷たく光り、襦袢が凍つたまゝ壁に掛つてゐるのも見え

る。全く不健康な部落の外見である。青白い生活。生きてゐるとは思はれない外見であると、一步此部落に足を踏み入れた時仙造は思つたのである。昔はこんな有様ではなかつたがと仙造は自分の大事な用件の合間に昔の事を考へるのである。俺の青年時代には此部落も明くて、芳香を放ち打てばかんと高く響く氣分であつた。あゝあの女も亡くなつた。美しい娘だつたが。何でも時世時節と言ふが、或はさうかも知れない。あの娘の家も今は零落して、遠目にもやはり不健康な感だ。くらしの良かつた家が一軒々々零落して行く。氣分も茶色の健康色から蒼白な不健康へ……。此二つが相寄つて今の雰圍氣が出来てゐるのだ。家柄を誇つてゐた庄屋の家も近い中に財産整理をすると聞くが人の噂では家も残るまいとの事である。昔の由緒ある家が没落するのは人事件乍ら堪へられぬ思がする。牛が嘶き馬が唸る世の中だ。拾ひ金でもした連中がはびこつてゐるのだ——彼はこんなことを次から次へと考へてゐた。しかし重大な用事は常に頭に付きまとつてゐた。廣木の前で言ふべき腹案は十町の間練つて來た。彼は小作料の相談に廣木家へ來たのである。廣木は七十に近い財産家で、それも先祖からの繼承であつたが押しもきき、地方では百萬長者でとほつてゐる人である。村の小作人達はたいてい廣木の田を耕してゐる。仙造も昔から廣木家の小作人であつた。

考へながら門まで來た時彼は入るのをためらつた。心臓の鼓動が激しくなる。百姓の金持によく見る通り門が鬼の喉の様に黒く頭上に聳え、氣後れがしたからである。部落の朗らかさは此の家一つに吸収されたやうな堂々たる建物であつたが爲である。思ひ切つて歩かうと思つたが脚の筋が固くなつてゐる。彼は出来るだけ音をたてぬやうに擦り減つた下駄の踵から靜かに踏み付けた。物を盗みもしないのにびく／＼する必要があらうかと自分でも思ふのであるが、此の家の門まで來るとこんな氣持になつてしまふのである。道々自分を勵した事も必ず無駄になつてしまふのである。

仙造は以前から廣木に金を借りてゐた。又昔から廣木家の小作人である。こんなことが彼にどんなに努力してもこんな動作をさせるのである。道では音もたてなかつた下駄が踏み固めた門の通路では意地悪く鳴り響き景氣の良い反響をひき起す。彼はその音さへ氣になつて仕方がなかつた。衆人の注目の中を歩く様な氣まづさを覺えた。

待たされた一室の入口も向側も襖で、それには何やら曲りくねつた字が書いてある。左はガラス入の念の入つた障子、右は床の間で水仙が生けてあり、軸がかゝつてゐる。眞中には低い廣接机。之が此部屋の全部であつたが仙造の目にはひどく豪華なものに見え、此空氣の中に身を置くのは可なり苦しい事であつた。

疊は彼の家のと違つて備後表である。仙造の家の中味の出かゝつた七島疊は歩く度に、又子供等が角力をとる度に埃が舞上る。彼の足袋はそれには如何にも相應しい代物だが、こんなに立派な疊の上では、ひよつとして汚い足跡でも付いてはゐないかと、そつと後を振返る程氣まづい。電燈も異いランプと違つて眩しい電燈だから、肩の當りの傷んだ着物は、晝の様にすぐそれと見ることが出来る。上らねばよかつた。立つたまゝでも話は出来たのに。と彼は後悔した。恐るゝ部屋を見廻して、ふと鴨居の上に掲げてある廣木の大きい寫眞を見付けた時、彼の目は吸ひ寄せられた様に動かなくなつた。自分を見下し睨み付けてゐる迫力に彼はたゞ／＼となり、このまゝこつそり逃げ出さうかとさへ思つたのである。

「士族」といふ大きな札を田舎ではよく門口に出してゐる。それと同種の心理が廣木にはあつたのである。俺は普通の人間とは違ふのだといふ意識が働き部屋を豪華なものに爲し大きな寫眞を掲げたのである。之に仙造は易々と眩惑され只廣木にはとうてい近寄れないと、自ら垣根を結ぶのであつた。

「用事は手短かに話してくれ。少し風邪氣味でね。」三十分程して出て來た廣木の顔はてら／＼光つてゐる。

「はい。今晚は、大へんお寒うございまして……」仙造はドスンと大きな石を腹に乗せられた思がして急には彼の用事は切り出せなかつた。

「實はその……我儘とは思ひますがその……申し兼ねると思ひますが……」

彼は道々考へたことを手繰つて言はうとしたが廣木の顔を見てゐると出かゝつた言葉がどうしても出ない。何から言つてよいのか全く混亂してしまつた。

「それでどうしたんだ。……小作料の事だらう。」彼は又ドキンとした。しかし言はうとして言ひ出せなかつた事を先方

に言はれて、ほつとし、やつと言葉の手がかりを握つたのである。

「へえ。昨年も引いて載いて、今年もと言へばあんまり甘えたことゝは思ひますがその、……御存じの通り、あの風は吹きましたし、寒落はしましたし、それに私のくらし向もあんな態ですから……」

仙造にはどうしても完全な言葉が言へないのである。何れも半分言つて後は言へない程臆病になつてゐる。何とか向ふで言つて呉れるであらうと期待してゐるのに廣木はやはりむつとりしてゐるので彼は一層ぢぢみ込み、もじ／＼し始めたつひに彼は勇を鼓して續けた。

「皆神力しんりきを作つてゐましたので、丁度風に當つたのです。早稲は皆駄目でした。坪刈びんかりでは一升五合しかありません。尾町おまちを作つとけば良かったと今思ひますが……。」

「お前の家の内情も知つてゐる。しかし、こちらもお前達が外から見る様に樂ではないからな。今年はまあ、お前も苦しからうが立派に納めて呉れんか。」

「毎年の事で、言ひ難いのですが、私たちは本當に陽干になりさうです。今年は米がほんとうにないのです。坪刈の時に一升五合あつたのも製米してみると一升二合位しかないのです。風が當つたのでせう。し、ひら、粃かがたいへん多うございました。どうぞお願ひです、幾分でも引いて戴きますと家内中皆助かるのですが……。」

「まるで俺がお前達に奉公しとる様だ。今のところは。お前達に食はせる爲にな。……お前達はいつも米がなかつたといふが、それはあまり信用出来んからね。第一坪刈りの時にでもだな。あんなにぞんざいな粃かの落し方があるものか。えゝ。坪當りの收穫がほんとうに少なければ、それは小作料を引かぬこともない。だが俺はあの時薙の下を見た時びつくりした。薙の下は粃だらけぢやないか。それでよく收穫が少かつた等と言へるね。それから唐箕にかける時にも、あんなひどい廻し方があるかい。あんなにすりやよい米まで出てゆくぢやないか。そして米が少なかつたといふ。お前達は、どんな手段を取つても坪刈りの收穫を少くし小作料の引下をしようといふのだな。尤もそんなつまらぬ手段にはこちらも易々

とは乗らんがね。そんな汚い根性をのけて正直にしたらどうだい。昔から『正直の頭に神宿る』といふではないか。あんな行ひは俺は絶対に嫌だ。」

「いゝえ、そんな……いゝえ、私は決してそんなことはしてゐません。」

「お前はしなくても他の者がすれば同じ事ぢやないか。いゝか、誰でも田地といふものは只で手に入れたのぢやないのだぜ。代々の苦心は大したものだ。山間部に田地を開いてゆくのは並たいていの苦勞ぢやなかつたのだ。その先祖の財産を繼いだ以上俺は決して不孝者にはなりたくない。第一今の者は働きが足らんと思ふね。働かずに入の物を取らうとしてゐるぢやないか。俺は此の年になるまで先の村までは車に乗つたこともない位だ。それなのに小作人たちはどうだらう。よく考へて見ろ。俺が若しお前の言通りに『ぢや五分だけ引かう。』と言つたとしたら働かないでお前は俺のものを只貰ふのと同じやないか。そんな馬鹿なことがあるものか」

「……………」

彼は何か言はうと思つたけれども反抗するやうに思はれては猶悪いと思つたので黙つてゐようと決心した。ほてつた廣木の眼がギロリと光る。

「それから、あの金は今年の中に何とか片を付けて呉れ。去年は利子も入つてゐないのだから、是非何とかして呉れなくては困る。」

焼火箸を突つ込まれた様なうづきが全身をしびらした。金庫の錠のガチャリといふ音が記憶の中に聞え、三百圓の札束と證書が頭の中で廻轉し始めた。益々悪い方に向つて行くと彼は混亂した頭で考へた。わざ／＼お説教を聞いたり借金の催足を受けに來たりした自分の馬鹿さ加減に腹がたち、一方ではやはり駄目だつたのだといふ、失望が感ぜられ此の部屋に居るのが一分でも長ければ長い程百年経つ様な苦しさを感じた。一分でも早く廣木の前から逃れたかつたのである。

命の縮る思をして外に出るとやはり寒かつた。ねずみの様にこそ／＼と而も落膽して門を出た。段々廣木の門が遠くな

ると奇妙なことに、彼の絶望、それから起つた諦めは段々と影が薄くなり大膽に又不平になり始めた。彼はこんなことを考へた。

——廣木が何だ、目も口もある只の人間ではないか。只俺と違ふのは親父から財産を貰つたのと貰はなかつた位のものだ、それでも殿様ではない。それなのに殿様か何かのやうに恐れたりなんかして、何といふ臆病者であらうか。あゝ俺はどうしたといふのだらう。廣木の影にさへびく／＼して。借金は借金、小作は小作だ。恐れることは何處にもなかつたのに。——

段々家が近くなると彼の頭には家族のことが浮んできた。貧しい彼等の生活。段々と追ひつめられて行く様な淋しさ。子供に一杯の飯さへも、米櫃の都合では禁ぜねばならぬ辛さ。——妻は今どんなにして俺の報らせを待つてゐるだらう。白湯でも沸かしてゐるだらう。子供達は横で居睡りしてゐるかも知れない。いや悲しさうに俺の歸りを待ちながら門口の足音に耳を澄ましてゐるかも知れない。いやいや薪が生しかつたから煙にむせ、悲しさで泣いてゐるかも知れない。可愛さうなものだ。それなのに此の俺といふ男は何とだらしが無いのだらう。一戦も交へずに旗を捲いて歸るとは。俺の肩には彼等の生命がかゝつてゐる。俺は彼等の柱石ぢやないか。希望ぢやないか。

仙造は廣木がすぐ耳許で怒鳴つてゐるやうに思へた。『大体小作人は人の物を働かずに只取らうとしてゐる』とか『藥代は拂ふが借金は踏みたほす積りか』とかいふ言葉がぎん／＼と頭をいためる。

——一割三分二厘の利子とは何だい。それに利子は天引ではないか。苦しまぎれに利子は高いと思つたが借りたのだ。あんな高利では拂はうと思つても拂へるものか。働が足らんとか何とか勝手に言ふが良い。俺が働いてゐるのはお陽様を知つてゐるのだから。自分が照つてゐる時はいつも働いてゐると。しかし俺はちつとも金がたまらない。あんなに旦那に取られてはたまらないのが當り前ぢやないか。旦那が今の田地になすには並大抵の苦心ぢやなかつたと言つた時俺は何故『一層苦勞して、あなたに儲けさせたのは私たちですよ』と言はなかつたのだらう。どうして損せぬやうに小作米や借金

を取り立てるかといふ事ばかりを心配してゐるから風邪の神にも取つ付かれるのだ。俺のやうに貧乏暇なしには風邪なんかひいてる暇はないのだ。薬代は子供の分であつた五十銭だ。薬代を拂ふなら借金も拂へとは何といふ言草だ。三百圓と五十銭か。

——それにしても今の生活から浮び上る工夫はないものか。御徳政といふことが昔あつたといふが今の世の中ではそんなことは出来ないのだらうか。一年や二年小作米を搾り取らなくても旦那は困りはしないのに。皆でやらぬやうにしたらどうだらう。何か騒動でも起るのぢやないか。それも直ぐそこに來てる様な氣がするが……

強く風が吹いた。彼が反射的にマントにくるまつた時、彼はフト自分が今まで何を考へてゐたかを知りゾツとした。

——いけない。何といふ大それた考を持つたのだらう。先祖からの恩のある家に仇で仕返しをするなんか。

彼は急に何も考へまいとする様に、前かゞみで急ぎ始めた。自分の考に驚き、悪い事をして追はれてゐる様な氣持であつた。寒い松の梢の音にふと空を仰ぐと、深い空の奥に星が凍り付いてゐた。突然星がびくつき、大きな流星が矢の様に尾をひいて奈落へ落ちて行つた。大きな流星であつた。星が消えない中に思ふことを言へば願がかなふと言ふのに、失策つたことをしたと、取かへしの付かない機會を失つた如く一寸失望したけれども、子供らしい事だと氣が付いたので次の流星を待つ氣にもならなかつた。後には只自分の腑甲斐なさとしさが残つた。寒さがチク／＼と腰を刺した。

年も餘す所五日しかなく、村人の顔には焦燥の色が刻み込まれてゐた。それに寒さが思ひ出したやうに押寄せたので尙更年の瀬らしい氣持がしてあはたゞしい。——貧乏人よ、金があるか。米があるか。恐らく無いだらう。しかし年は來たのだ。早く一つだけ年をくれ。頭には二倍の白髪が出来るだらう。顔中の皺は一層深くするがいい。金なく米なく、まごつく者は皮膚がみみずの様にはれるまで引つばたくぞ——と撓む鞭をビュ／＼鳴らして追ひたてるものが感ぜられる。外に聞える足駄の音も凍て付いた土に淋しくせはしく甲高い音をたてゐる。

彼が廣木家を訪れた五日後である。小作料引下に失敗した小作人達は小作人會議を開いた。彼等小作人は個人的に廣木



家の門をくぐつたが仙造と同じやうな説教と借金の催足を受け、或者は失望し、或者は恐れ、或者は落膽し、或者は憤慨して徒らに歸つて來た。昨日有志に依頼した小作料引下の折衝も、廣木の強腰に取付く島もなく、とうとう決裂した。かくして此の小作人總會となつたのである。

皆寒さうだ。前の人の脊に膝をもたせたもの、横の人に犇とくつついた者、皆思ひ／＼の防寒法を實行してゐた。淡い電燈が兩部屋の中にもぶら下り、農民達の鼻や額を照し、生活に疲れ而も休息を知らない、やつれた影像を作り出してゐる。

陰影の深さに陰險といった感が深い。彼は寒くなると節々が痛むのでマントにくるまつて兩膝を懷き壁にもたれて寒さを凌いだ。四十戸ばかりの頭が時々動く外、部屋の空氣は沈んでゐる。『半分の稔』とか『風』とかいふ言葉が緊張したざわめきの中から拾ひ出される。部屋の空氣がけはしい爲か、寒さが餘計に身にこたへるのを仙造は感じた。

「そこでみんな。俺達は農民組合に頼る外、取るべき途はなくなつた。組合へ加入するについては誰も異存はなからうな。」

格さんが一同を見廻して言つた。格さんは、小學卒業の小作人に過ぎないが、その才智の爲村では切れ者で通つてゐる人である。一寸沈黙が続いた後、格さんは又續けた。

「異存のある人は此處で言つて呉れ。親類關係や溫情關係で加入して都合の悪い人は遠慮はいらぬから言つて呉れ。」

頭が右に左に搖れて少しざわめいたが誰も答へなかつた。

「ぢや仕方がない。そつちの隅から茂君はどうかい。」

「皆が加入するなら勿論俺も加はる積りだ。」

「次に貞雄君は？」

「勿論大賛成だ。大体地主の奴は横暴だよ。村の多くもない田畑を獨占しやがつて、勝手に小作料を吹つかけるんだからね、俺等あ、一生貢ぐやうなもので一生涯浮ぶ瀬はないんだ。而も油汗は流してよ。ちつたあとらしてやるのも藥になる

と思ふ。暫く一表も納めない様にしようぢやないか。加入には大賛成だ」

目が凹んで顎の張つた貞雄は、若者らしい熱心さで早口に答へた。自分の言葉に興奮して口端に痙攣さへ起してゐる。貞雄は廣木の説教を最も鋭く感じた一人である。二三ヶ所から拍手が起つた。貞雄の友達の青年がやつたのである。その後加入者はぐんぐ増加して、只一人の不賛成者もない。

「仙造さんは？」

仙造は少し下ギマギした。まだ誰も不賛成を唱へたものはない。それに不賛成を唱へるのも變な氣がする。彼は加入したくないとは思つてゐないのだが、組合とはそも／＼如何なるものであるか、それが分つてゐない爲にためらつたのである。皆農民組合なるものが分つてゐるかどうか甚だ心もとない有様だが、兎に角威勢よく加入してゆく。恐らくこんな爭議に付まふ群衆心理であらう。しかし一方には、地主に對する反感や、生活の不安、それから生ずる依頼の心があるのは確かである。彼等は頼みにしてゐた有志の調停が決裂した今、此に救ひを求める氣持は確に銘々が持つてゐた。又個人の力では、決して地主に對抗出來ず、否對抗所か對等の氣持も持つことが出來ないから、十分に強い團體の力を求めてゐたのである。貞雄の様な青年でさへ廣木の前では猫の様に取扱はれる。それ故に彼は一層陰では強がるのである。仙造に先日自分のみぢめな影が通り過ぎた。彼の心の奥からは青年が感ずる様な反逆の氣持が頭を擡げて來た。妻——子供達と順々に彼の頭は幻を浮べた。之は彼の反逆の氣持に急な拍車を掛けた。

「俺も賛成だ」

仙造は出来るだけ元氣に答へた。

——一家の爲だ。さま見る。先日の仇は幾分でも今返してやつたのだから、あゝ爽かな氣分だ『先祖代々の恩人』と古い血が私語いたけれども周囲の雰圍氣は、そんな氣持を直ぐに打消して了つた。誰一人として反對を唱へる者はなかつた。

仙造の村は此縣の西端で昔は縣の北海道と言はれた程の田舎であつた。しかし今は鐵道が通りバスが通り、交通が便利となるに従つて文化の程度も高まつた。鐵道の開通は大正の終りである。昔のまゝの思想と、昔のまゝの生活様式は交通不便により自ら保護されてゐた。以前の人々は依然として昔の生活をした。仙造は昔の人間である。長い物に捲かれるのは當前と考へてゐる人間である。淳風美俗がその最も謳歌する所である。之が彼の掟である。若い者は、昭和の空氣の中で成長して老人とは全然別の考へ方を有してゐる。彼等は世の一般から大して後れてはゐないから古い人々と對照する時そこには甚しいチグハグな滑稽ささへ感ぜられる。

村の田地は四百町歩程でその中には山間部の田地がその三割を占め海水の浸入する田地も多い。農家は全部で五百七十。一戸當り耕作段別は僅かに七段に過ぎぬ。廣木は廣大な地面を所有してゐるが他には地主と認められる者はない。小作料は漸次騰貴した。地主は一人で小作人は多い。小作料の騰貴は必然の結果であつた。耕地は小作人の手で改良され收穫はより多くなつたが、より高い小作料に彼等が取る割合は少くなつた。所によつては、米は全部小作料となり、裏作のみがその収入となつてゐる所さへある有様である。

仙造の家は代々廣木家の小作人である。海水の浸入には堤防を築き、山間に水を引いた永小作人である。

彼等の謝恩の情が芽を出した。底地は廣木、上地は勝治の家が支配してゐたが、維新後地主たる廣木はその權利を漸次鞏固にし、勝治の家は彼の明治の初の地租政策の犠牲となつた様な有様で、土地に對するその權利も單に借地權たる永小作權にまで引下げられ、今では小作料に苦しんでゐる。地主の所有權は此上なく固い。しかしそれは仙造等の努力の結晶である土地なのだ。廣木は土地から上る収入は専ら利殖の爲に使つてゐる。小作人には借してゐるが高い利子の爲にそれは農業には投資されてゐないのと同じである。昔の地主といふ特色は最早完全に失はれ單なる支配者に過ぎないけれども仙造は老人である。祖先から傳來した恩義の情はまだ忘れることが出来ないものである。しかし地主たる廣木は温情をおし付けながら事實は單に物質によつて結合してゐるのに過ぎない。此の故に仙造は悩むのである。先祖からの恩義を感じて

廣木に對すれば廣木は已に物質的である。單に物質的として對すれば仙造の心に叛逆の血も滲く。しかし物質的に近付けば廣木は温情を押付ける。仙造はその爲に廣木に對して今は暴君に對する様な或種の恐怖を感じるやうになつて了つたのである。

貞雄は新しい型の人間である。農村更生の種々な掛聲が勇ましく掛つた時、農民は指導者の指す方向に或は西へ或は東へと奔つたが結局は疲れてしまつた。新しい型の人間は此の時盛に地主に對して平等對抗の感情を懷く様になつたのである。若い者は、その行動が一つしかないからこんな問題に面しても態度は明白であつたのであるが、仙造は一寸ためらつたのである。

こんなものに加入して廣木に睨まればもう仕舞だ。といった氣持が舊來の道德に多分に加はつてゐたのである。

全農の縣支部長が郡農民大會の爲、丁度來てゐたが、彼は格さんが行くと早速加入させ翌日の大會に是非皆出席する様にすゝめた。

やはり寒い空つ風の吹く日であつた。大會に出席するため農民達は九時には家を出た。仙造は貞雄や茂とも連になり三里の街道をバスにも乗らず埃の中を急いだのである。仙造は例の粗末なマントを引つ被つて急いだので風は冷たかつたが背中は少し汗ばむ程であつた。農民組合といふ名は聞いた事があるのであるが誰も詳しい事は知らなかつた。貞雄は只一人で盛に氣焰をあげた。仙造は只農民組合に對する好奇心で一杯であつた。強い廣木に對抗出來るといふので、何か知ら嬉しい感情がこみ上げ、そつと微笑さへ洩らして急ぐのであつた。

意地悪さうな男達がうよ／＼してゐる中に巡查が其所此所に立つてゐる。空氣はあはたゞしくて重い。仙造は段々不安になつて來た。こんなものとは思つてゐなかつたので彼は明らかに面喰つたのである。

「さあ皆前へ前へ。こんな集會は前でなくちや分らんからね。」

貞雄はわるびれずに會場を見廻して後、一行を前の方に追ひたてた。仙造は氣味悪くなるにつれ、段々と尻込みしてそ

の時はもう一番隅に、茂の肩の陰にかくれる様にしてゐた。

「仙造さん、さあ行かう」

仙造は前列の一番右に席をとつた。一番後から入つたからである。まだ會は始らないので一同は前列には來たものゝ、氣まくりが悪くなり、横の人を見たり、着物の工合を直してみたりして照れ臭さを繕つてゐる。貞雄は左右の同村の人々を顧み「何心配することはない」といふ目付をしてゐる。無智な人々をかばふ様な態度である。何時買つて來たのかバツトの煙を吹かしてゐるが人差指で幾度も／＼灰を落してゐる。彼自身大分上つてゐるのである。なあに誰にだつて負けるものかといふ態度が一動作毎に現はれてゐた。

仙造の後には褪せた紺の着物を着た老人が居たが仙造はふり向く余裕も持たなかつた。間もなく警官が大勢入つて來て彼の横の縦の机に着席した。彼は心配氣に警官を眺めてゐたが忽ち顔色が蒼白になつた。去年仙造の部落に居た牧野巡査が入つて來たからである。牧野巡査も驚いて立止つたが直ぐつか／＼と仙造の所に寄つて來て尋ねた。仙造はおろ／＼しながら聞かれるまゝに答へたのである。彼は此の時つく／＼悪い席をとつたと後悔した。

「それは困つた事が起つたな。しかしこんな所に來ちや困るよ。殆ど全部來てゐるやうだが……。別に解決の方法もありさうなもんだがな。」

「村の有志にも一應頼んだのですが一言ではね付けられたのです。農民組合に加入すればうまく地主と交渉もして下さるし、私達も大へん利益になると聞きましたので皆かうして出て來たのです。」

牧野巡査は一段と聲を落して、

「さうかね。彼所の地主の評判はこちらでも知つてゐる。しかし君達は農民組合を何だと思つてゐるか。何も知らんかも知らんが、皆左翼的の連中ばかりだよ。」

ハンマーで打ちひしがれた様に仙造はびつくりした。段々無氣味になつてゐた農民組合が突然大きな怪物の姿となり彼

の頭上に覆ひかぶさつたやうな氣がしたのである。

「困つたなあ!! たいてい來る様だな。何とか別に工夫はないかな。しかし此所では何も話せないから歸りに署まで來たまへ。話があるから」

貞雄には小聲が聞える筈がなくやはり傲然を裝つてゐる。彼はとう／＼情なくなつた。會が始つたが全く失神した様に會の進行にも氣が付かなかつた。牧野巡查の眼に常に射られてゐるやうな氣かし、左翼といふ言葉が頭にこびり付いて離れなかつた。時々張り切つた辯士の聲が聞えると仙造はそつと警官の顔を盗み見た。緊張する警官の顔! 彼はその度に脊筋に氷の走る思がした。

いよ／＼新加入者の發表が始つた。格さんが席を立つて出てゆく。代表者の外に二人程と注意されると、皆顔と顔を見合つた。仙造は狼狽した。「では一番近い人出て下さい」彼はやにはに机にかちり付いた。

彼の元からの精神——服従と淳風美俗——は急に勃興して來た。彼は牧野巡查から左翼的と言はれ、只その言葉に恐れてしまつた。そして、あゝ俺は何といふつまらね行動をしてゐるのだらう。こんな積りではなかつたのに。やはり前の生活の方が、こんな所に來るよりも余程ましだ。等考へたけれども席を蹴つて歸る元氣はなかつたのである。

その夜彼は集會にも行かず暗い部屋の中に閉ぢこもつてゐた。其時集會所である格さんの家には例の支部長と外二人の若い組合員が乗りこみ座談會を開いた。座談會は夜中の二時まで續いたので一同は格さんの家で夜を明かした。

朝になつても仙造は集會所にも行かなかつた。とう／＼貞雄は迎ひに出かけた。仙造は迷惑さうな顔色で悲しさうな様子さへ見受けられた。

「今度來た人達は、みんな偉い人達だよ、何でも支部長と若い一人は大學を出たのださうだ。其他組合には博士も辯護士も居るさうだ。心配することはない。兎に角來て話を聞いてみるのだね。」

「俺あ横文字の付くのや主義が付くのは大嫌ひだ。俺は日本人だよ。」

「何言つてゐるかね、おぢいさん。そんなもんぢやないのだよ。」

「でも牧野さんはあんなに言つたぢやねえか。俺あお上のことは何でも聴く積りだ。」

「農民組合たあ、お上も許してござるのだ。農民組合は俺達農民が團結して正當な權利を擁護するもんだからね。」

「大体どんなことを言ふのだい。」

「色々と聞いたがたいてい忘れてしまつた。しかし始は何だか昔話のやうであつた。しかしよく聞いてゐるとそれは皆俺達に直接關係のある昔話だつたのだ。土地持とか、中地頭とか言つてたからね。話は皆上手だ。よくわかるやうに話してくれるが話す時の勢は恐しい位だ。こんな恰好をしてね。」

貞雄は腕を組んでみせた。

「所で昔は百姓も地主に對しては今よりはもつと良かつたさうだ。しかし何でも御維新後殊に近頃急に悪くなつたのださうだ。それに付て地主の我まゝを例をあげて説明して呉れた。こんな例もあつた。——二人の地主が話し合つて土地を賣るとするね。買つた方は此れ／＼の條件なら小作させると言ふだらう。小作人は苦しいからどんな條件でも承諾するだらう。——こんな悪いことでもするさうだ。こんな悪い地主に苦しめられない爲には組合の大きな力が必要であると盛に言つてゐた。あの人達はほんとに俺等の事を思つてゐるね。第一金はとらうとはしない。誠に潔白だ。俺あ有難くて涙が出たよ。一方廣木は今までさん／＼よい汗を吸つてたんだ。聞かされて始めて俺等の無智に氣が付いた。どうだい一緒に來て話を聞かんか。俺も話で少し賢くなり生れて二十七年目に廣木の前で存分言つてやつたよ。之も組合のおかげだね。廣木と來ちやあ、まるで一口も口をきく隙がなく、青くなり赤くなりさ。近頃夜の目も寝なかつたと見え目がたゞれてゐた。」

貞雄は段々興奮し、雄辯になつた。廣木の事が話題に上ると仙造には明らかに困惑の色が浮んだ。

「要するに廣木さんにどんなことをしようと言ふのか」

「先づ今年は三割勝手にこちらで引下げるのだ。それから來年は五割、次は七割。終には全然納めないのだ。」

仙造は驚いて目をみはつた。

「おい／＼そんなことをしたら直ぐ赤着物だよ。そんなひどいことを組合では言ふのか。」

「所が赤着物にはならんのだよ。先に言つた通り偉い博士なんか居るだらう。心配はない。廣木が若し告訴した場合はこちらには不納の米があるらう。それを資金でやるのださうだ。工場にストライキといふことがあるだらう。あの場合だつたら、給金を貰ふのが労働者だね。しかし俺達の場合は米を貰ふのが廣木ぢやないか。俺達の方に有利だよ。従つて裁判は長引く程こちらに有利になるのだ。相手の權で角力をとるわけにはなるからね。終には廣木の方が續かなくなり負け了ふさうだ。さうでなくてもこつちには偉い博士や辯護士も居るのだから。結局は廣木の方がブツブれるのだ。之も聞いたことだが、廣木などブツ倒すのはわけないさうだ。一分一厘までケチに取上げた金は別の生産部門にはあまり出て居なくて、只俺達には高利で貸して利殖をはかつてゐるだけださうだ。だから俺達が團結すれば直ぐに困るのださうだ。仙造さん、大いにやつてみる氣はないかね。」

「そんなにして結局世の中はどうなるのだ。」

「分つてるぢやないか。地主がぶつ倒れりや今の小作田はもう俺達の物ぢやないか。組合の目的はそこにあるのだよ。法律なんかも今は只調停の役目しか務まらない。根本的の改革は農民組合によつて出來上るのだとも言つてゐたからね。」

仙造には恐怖の色が浮んだ。巨大な惡魔!!何か重大な事が直ぐ門口まで來てゐる様に感じてゐたのは此の怪物であつたのか。而も今は俺の上にのしかゝつて來てゐる。仙造には貞雄の顔が惡魔に見え、ニタリと眞剣に笑ふ顔に一層強くその影を認めた。

「お前はその組合に加入する積りか。牧野さんの言はれた主義者になる積りか。」

「そんな事は知らんよ。むづかしい主義とか横文字はいらないんだ。只俺は俺の生活に即して『やらう』と決心してゐる



ばかりだよ。話を聞いてみると加入した部落はうらやましい位樂な生活だ。あんたは樂な生活だ。あんたは樂な生活は嫌ひかい。一年分の食糧保障の法律を作る爲に努力してゐる組合をあんたは好まんのか？」

「昔から小作料は納めるやうに決つてゐるぢやないか。」

「昔と今は時代が違ふよ。廣木に怒鳴りこんだ時も廣木が言つたよ『昔から此の通りで』とね。そしたら大學出のが直ぐ言つた『昔と今は時代が違ふのだ、おぢいさん。そんなに昔がよいと言つて、今の時世に奴隷でもこき使はうと言ふのかね。』之には廣木は一言もなかつた。やはり時代が違ふのだね。」

「しかし俺のところは先祖からのあの通りで。そんな事をしたら悪いぢやないか。いつも顔と顔をつき合はせるのに。」

「昔からの小作だから色々な權利があるのださうだ。一度話を聞いてみることで」

「俺は恐しいのだよ」

貞雄はさげすんだ目付で仙造を見やつた。

「俺は二年生の手腕があるとほめられたんだぞ。農民組合には若い者を特に入れたがつてゐるのだ。彼等とは君、僕で話してゐるのだ。『草場君』と俺が呼ぶと『オイ』と答へる。驚の様な目をしたあの大學出かね。」

彼は義俠な戰士の様な氣持で、彼等とそんなに近い間柄になつたのを誇る様に見えた。

「頼むから俺にかまはないで呉れ。やるならお前一人でやつて呉れ。」

仙造の呼出しは失敗した。『無智な老人。』貞雄はその頑固さに憎らしさへ感じた。

格さんの家には一同集つて酒を飲んでゐた。皆戰勝氣分である。高笑ひが盛んに起つた。

居酒屋に酒賣ひに行つた四人はなか／＼歸らぬので貞雄は迎ひに行つた。凍りついた道の眞中に醉漢が寝てゐる。一升徳利は大切に懷いてゐる。彼等の一人で歸り道に飲んだものである。貞雄はとう／＼居酒屋まで來てしまつた。

菓子やすめるが散亂してゐる。一人は醬油をかけたかまぼこを握つてゐる。他の一人はだら／＼涎を流し、もう一人は

大聲で怒鳴つてゐる。貞雄が入るや否や三人は大聲で囃した。

「貞雄君!!、君は偉い。酒だく。俺等あ勝つぞ。祝ひだ、さあ飲め。」

「皆待つてゐるのに、こんな所に坐りこんぢや困るな。歸らう。」

「何だい。廣木が何だい。三割引下か。コリヤくだ。六俵儲けたよ。文句言ふなよ。」

「困るなあ、オイく。」

「廣木の奴はだな。しみつたれで車にも乗らん。菓子も食はん。見てゐろ、いゝか。それ此通りだ。」

二錢の駄菓子を一口に食つて威張つてゐる。廣木のしみつたれを貶す積りである。貞雄は「もう分つた。歸つてからやらう」と引きたてやうとしたが動かない。

「さはるな。さう急がんで君も坐つてやれ」

「貞雄君飲めよ。人の金で飲めることあ滅多にあるもんぢやないからな。」

貞雄は彼等の乞食のやうな根性に嫌惡を感じた。あまり彼等の無自覺に腹がたつた。苦しい中から皆で出し合ふ尊い資金であるのに、彼等は唯人の金として徒らに酒に費し、自分が使に來たことさへ忘れてゐる。しかし此所で言つても駄目だと思つて言葉に出すのは差控へた。卑しい根性。しかし何うして彼等はそんな氣持になつたか? 彼はその原因を了解し彼等の氣持もわかる氣がして心の中で呟いた。

——卑しい小作人達よ。もうすぐ君等にも春が來る。花が咲き鳥が歌へば君等の心も素直になるだらう。

彼は一人で酒を持つて歸つた。格さんの家の入口まで來ると佩劍の音と共に七つ程の影がすれ違つて通つた。彼は愕然とした。家の中はひっそりして皆途方に暮れた顔付だ。

其後爭議には警官の手が入り急テンポの解決が見出された。次の三ヶ條が決定された。

一、小作料は今後永久に一割五分を減す。

一、爭議の費用は地主と小作人と各々同額を負擔する。

一、農民組合は脱退のこと。

貞雄は此の決議に對して大いに不満であつた。最後の項は最も不賛成であつたが、今になつては仕方がなかつた。小作人達は皆喜んでゐた。貞雄は皆の無節操が癪に障つた。東風が吹けば西へ、西風が吹けば東へと一定の見識がなくふら／＼する農民の姿を如實に見せつけられる思がした。

年が改まり五日程して農民組合から手紙が來た。

余は貴下等が今回取りたる行動は絶対に承認し難きものがある。乞食にも義理がある。盗人にも義理がある。貴下等も乞食でも盗人でもない。而もその行動は彼等以下の行動である。犬も喰はない所か、豚でも喰はぬぞ。大會前後の忙しい中を二晩も寝せずに引き出しておきながら、話が片付いたからと端書一本は何たる事か。こちらは天下の農民組合だ。寒さ辛さも貴下等の事を思へばこそ敢へて自分の儲けにもならぬことをしてゐるのだ。凡有る壓迫、迫害を物ともせず進んでゐるのだ。貴下等はよくも人の面をふみつけることが出来るな。人の眞心が分らぬのか。

何故破れ羽織でもよいからひつかけて來て、本部で挨拶をしないのか。それでない限りあの失禮千万な端書は絶対に認めない。相當の返事を待つてゐる。

全農△△支部爭議部長

草場

小作人達は皆身ぶるひした。問題が片付いた以上此の上こんな組合と關係を有することは恐しいことであつた。貞雄の頭には草場の鋭い眼光と、キビ／＼した步調が浮んだ。此の間の居酒屋の光景を思ひ出すと彼は小作人達の無節操に泣きかくなつて來た。

「誰が一体失禮な端書なんぞ書いたんだ。俺はすぐ明日出かけて理由を話して來る。此村には一人も腰のある人間は居らぬだらう！」

皆は又手紙を出すべきかそれとも行くべきかがやゝ相談した。手紙と主張しても誰も書く者はなかつた。行くべきだと主張する者も貞雄を除いては自ら行くと言ふ者はなかつた。

仙造は内心安堵した。結局俺は正しく進んで來たのだ。しかし農民組合で廣木を脅したのは確に役にたつた。俺は表面にたゞなかつたからよい顔をして廣木にも會へる。而も皆と一樣に利益も受ける。等と狡い考が頭を通り過ぎる。弱い者の恐怖である。——やはり俺は正しいのだ——。(完)